『西南アジア研究』No. 91, 2020

トハーラの境域と，藍市城と活国都城

Notes on Tokhāra : Towns and Territory

桑　山　正　進
Shōshin KUWAYAMA

Resumé The *Shiji* 史記（completed in c. BC 91）and the *Hanshu* 漢書（completed in c. AD 82）describe that Daxia 大夏，or Tokhāra, is located to the south of the Guīsuǐ 嬀水（the Amu River），in the northern part of present-day Afghānistān. Tokhāra also appears in the 'western-region' chapter of the *Weishu* 魏書, completed in AD 554, but this Tokhāra covers a much more extensive area including various northern regions beyond the Amu River, which also more or less matches Xuanzang's 玄奘 account of the area in his *Da Tang Xiyuji* 大唐西域記, edited in AD 645-646. Hence, a question arises : how was the rather small original Tokhāra expanded to this size ? In this paper, I argue that what enabled this expansion was the Kušāns' sway over the Da Yuezhi, rather than the Da Yuezhi conquest of Tokhāra. Making strange contrast with Chinese sources, the 10th century Persian geography *Ḥudūd al-'Ālam*, seems to have preserved evidence for the small original Tokhāra in ancient time. It informs that Tokhāristān, with the capital at Warwālij, lies to the east of Khulm. I also attempt to identify Lanshi 藍市 in Tokhāra of the Han time with a sizable town site north of Qal'a-ye Zāl at the confluence of the Amu with the Kunduz. Following the *Da Tang Xiyji* that refers to the capital of **War* 活 on the south bank of the Amu, Warwālij can also share the above site with Lanshi, in view of stratigraphy.

Keywords トハーラ（Tokhāra），境域（territory），藍市（Lanshi），活（Wan），カライェ・ザール（Qal'a-ye Zāl）

は　じ　め　に

欧人は世代を越えて大月氏クシャーン（Kušān）同一説であるが，漢文史料はこれを否定する。筆者は同史料を重視する。アフガニスタン北部の古代史において，大月氏はアム河（Amu Darya）流域にとっては外来の遊牧帝国（行国）である。クシャーンの出自は未明だが，大月氏進入前からアム南岸に居た民族ではある。前 2 世紀後半に大月氏はクシャーンを配下とした。前 36～34 年にこの関係が逆転し，大月氏は爾後歴史に登場しなくなる。大月氏王は翕侯号をトハーラ（Tokhāra）のクシャーンをはじめとする小長たち（土着）に授与した。トハーラびとはこれを絆に軍事政治経済の面で遊牧国に組み込まれた。翕侯号は匈奴には存在せず，康居，烏孫，大月氏にあった。翕侯は行国土着国両者関係の円滑剤で，授受が原因の両者対立の実例はない。また翕侯の中国起源説は論外である［桑山 2017 : 81-91］。

さて，『史記』大宛列伝と『漢書』西域伝に現われる大夏，つまりトハーラは，アム中流域の南部に位置する比較的狭小な地方であるが，『魏書』西域伝に至って，北岸地方をも包摂する広大な地域の呼称となる。『大唐西域記』（『西域記』）は，これと広さを同じくしたまま，トハーラを詳細に記録しているが，玄奘はそれを「トハーラ国の故地」と呼び，当時トハーラ国は存在しないような書きざまである。仏教典籍のトハーラや漢代のトハーラを思量した記録のようにみえる。このようにトハーラ名称の拡大使用は，北魏時代までにおこったのであるが，拡大が，昔の大月氏のトハーラ制覇によるものであれば，トハーラ国と呼ばれるはずがなく，『漢書』がそう考えたように，大月氏国と言えばそれで済んだであろう。トハーラが拡大してそうよばれるようになったのは，大月氏がアムの両岸を跨いで自分たちの国として以後，こんどはトハーラ在住の四翕侯が，やはり在住のクシャーンに統合され，且つクシャーンを代表とするトハーラびとが大月氏を攻破することとなった。トハーラ在住のクシャーンが大月氏の境域を征服したのである。トハーラびとが河向こうを席捲してそこをトハーラと呼んだとしても何ら不思議ではない。その後エフタルやテュルクが拡大したトハーラへ進入するが，かれらはトハーラにとっては外来人であり，名称を変えるほどの事件とはならなかった。『西域記』にまでこのような拡大トハーラの記憶が保たれたのである。おもしろいのは，10 世紀のペルシア語地誌 *Ḥudūd al-ʻĀlam*（『フドゥード』）である。これは漢文献と違って，現地の資料である。その中のトハーラ（トハーリスターン）は，旧に近い，伝世の地理状況が反映したとおもわれる。それは，バルフ東方のフルムより更に東に限定され，バルフ（Balkh）もフルム（Khulm）もトハーリスターンではないのである。フルムは真に興味深い町で，今の町の屋根付きバーザールの天井に，明の赤絵の小皿が嵌入されてあることもさりながら，フルムと西のマザーリ・シャリーフ（Mazār-e Sharīf）間，あるいは東のクンドゥズ（Kunduz）間は，いわばダシュトばかりでなんにもない。そうすると，『フドゥード』にいうトハーリスターンとは，ロバタク（Robatak）峠の東方，つまりスルフアーブ（Surkhab）河から東だといっているのに等しい。その首城をワルワーリジュ（Valvālij）としているのは，まさに往古のトハーラを髣髴とさせる。それならば，『西域記』

（645–646 年編纂）活国の都もワルワーリジュであって，活国の都はアム南岸にあるのであるから（『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻 6），それは現クンドゥズでは決してない。それより北のカライェ・ザール（Qal'a-ye Zāl）村の都市遺跡が活国都城であって，『史記』『漢書』の藍市，監氏城もバルフやフルムとはいえず，カライェ・ザール在の遺跡とみられる。以下にこういったことを記す。

1. クシャーン大月氏の関係

『史記』大宛列傳にあらわれる大夏は，キングズミル T. W. Kingsmill［1878 : 295–296］がはじめてトハーラに比定し，マルクヴァート J. Marquart［1901, p. 204］があらためてアム河中流南岸にあてた。『漢書』大月氏国伝に翕侯というものがあらわれる。翕侯を烏孫や康居の諸例に照らすと，かれらはトハーラ各地町邑を治める小長（康居の場合は小王）であって，土着のひとである。大月氏が当地に移徙したとき（前 138 年－前 133 年の間），トハーラは大月氏に靡いた。大月氏は臣属したトハーラの小長たちに翕侯号を授けた。烏孫の諸例から推測すると，翕侯となった小長は，遊牧帝国統治者に著しく近い位置にいて，その行政等に参入した。大月氏がアム北岸に出現した上限年代は前 138 年である。それは，隴西を出た直後張騫が匈奴に捕まった年である。当時大月氏は匈奴の北方イリに居て，未だ烏孫の復讐戦を受けていなかったことが，桑原隲蔵により証明されている。前 133 年は，漢武帝の元光 2 年で，朝廷では対匈奴開戦非戦の議論がおこった年である。王恢の献策中に，いま匈奴を潰せば，「北発も月氏も臣となるであろう」（『漢書』巻 52 韓安国伝）とあり，北発は北狄の国名あるは地名といわれる。月氏を西方の外族とみれば，前 133 年は月氏が西遷したあとである。大月氏アム流域進入の下限は前 133 年となる。内田吟風［1938］は方向を誤っている。

さて，史上に大月氏授与の翕侯は五所五人だけあらわれ，みな漢使の接待をするという。その所在に関する研究では白鳥庫吉の同定がもっとも自然で，それによると，五者は東西ワーハーン（Wākhān），バダフシャーン（Badakhshān），ヤムガーン（Yamgān），チトラール（Chitrāl）－マストゥージ（Mastūj）に居た。ここは大月氏国の極東地方で，前漢使節が最初に大月氏領にはいる門口に当った。因みに，対する漢の接待所は，安西敦煌間の懸泉置であった。大月氏国においては，ワーハーン西部所在の貴霜翕侯（Kušān yabgu）が前 36，35 年ごろ四翕侯を纏めて大月氏に叛した。当然翕侯号を破棄する。独立して貴霜王（Kušān šāh）と自称する。敗れた大月氏がその後どう動いたかは不明である。つまり史上に消息を絶った［桑山 2017］。

裴松之撰『三国志』30 巻末に引用され，シャヴァンヌ E. Chavannes が魚豢の『魏略』西戎伝に同定した史料には，3 世紀にトハーラが，罽賓，天竺，高附とともに，大月氏に服属したとしている。この時代トハーラは左記三国と併記されるほどの地域を有したのであろう。茲で言う大月氏とは司馬遷や班固のいう大月氏そのものではない。

それは『後漢書』西域伝上の貴霜翕侯の後裔である。大月氏がトハーラを押さえてから約百年後，貴霜翕侯は大月氏を征服し，周辺諸国にクシャーンシャーを自称した。これに対して漢だけは，大月氏国と旧のままそう呼んで貴霜とはいわなかった。これを解釈して，そうよばなかったのはクシャーンが大月氏族の一であったからだ，クシャーンと大月氏とは同じなんだというのが欧人である。大月氏国名を漢が更めなかったのは，漢が大月氏国の内訌と認識したからである。クシャーンは興起して遂にアム河の南北を結ぶ大国となったので，漢の認識は誤りであった。大月氏あるいは月氏呼称が漢文資料上に以後続用されたことは，後世の史家を惑わし続けた。

2.『魏書』吐呼羅国

大夏は『魏書』西域伝に吐呼羅国と表記された。その東は范陽，西は悉万斤，南が名称不明の連山，北は波斯という。これを魏收『魏書』の原文とするのが内田吟風［1972 : 374］である。しかし，范陽はバーミヤーン（Bāmiyān）の音写であろうが，バーミヤーン地方をトハーラ東部とみるわけにはいかない。バーミヤーンが歴史に登場するのは早くとも 6 世紀中葉である［桑山 1985］。ガンダーラ出身のジナグプタ（Jinagupta）は，553 年ごろ郷国を数人と出発，中国へわたろうとした。慣例であった北路を指さず，西へカーピシー（Kāpiśī）に向かい，「雪山西足」を経，エフタル国の中心に至り，ワーハーンを通過，南道から青海路で北齊に入った（『唐高僧伝』闍那崛多伝）。これはヒンドゥークシュ（Hindukush 雪山）を西の裾回り，つまりバーミヤーン経由で，北へ行った史上初の例である。ヒンドゥークシュ横断の商路が，従来のカラコルム（Karakorum）道と交替して 6 世紀中葉に突然現出している。出現当初は「雪山西足」（ヒンドゥークシュ山脈の西麓）という形で認識されたが，ややあってバーミヤーンは「帆延」の形でまず『隋書』に現れる。シムス=ウイリアムズ N. Sims-Williams 読解のバクトリア文書（書簡），「文書 cg」には，「城塞バーミヤーン」という言い回しがある［Sims-Williams 2007 : 80-81］。Cg を含む一群の手紙をシムス=ウイリアムズは最近 370 年前後に編年している［Sims-Williams［2018 : 69］。かれは fortress と訳出したが，バーミヤーンという名の城塞なのであろうか。これを後世イスラーム時代の資料にみえる shār Bāmiyān, she‘er Bāmiyān, 乃至 shīr Bāmiyān という言い方やその中国音である「失范延」（『隋書』巻 4，『唐會要』巻 73，『旧唐書』巻 40）と較べる必要があろう。昔からバーミヤーンのまちは「城塞バーミヤーン」という呼び方で通っていたのかもしれない。バーミヤーンの町は平地に城壁で囲うのではなく，自然の山崖上にあり，それがめずらしかったらしい［Iṣṭakhrī 1967 : 280］。4 世紀後半頃といえばバーミヤーンの町は未だ寒村程度だったろうから，山頂部に外壁をそなえた小さくも堅固なものであったことも，十分想像できる。そうすると，いまバーミヤーン渓谷を中心に三方の谷に並んでいる，7～8 世紀からゴール朝の，大小の城塞遺跡が思い浮かぶが，そのような形のものであったかも知れない［Le Berre 1987］。

さて元にもどって，范陽とは苑湯の誤写ではないか［桑山 1985b］。苑湯は唐の月氏都督府下の一州の名で，所治拔特山城（バダフシャーンの町）の雅名である。当都督府は早く652年から存在し，661年に西域十六都護府が完結して実効した。『北史』は当時編纂過程にあった。その西域伝吐呼羅国の東部であるバダフシャーンに苑湯が採用され，のちに誤写が起ったとみるのである。

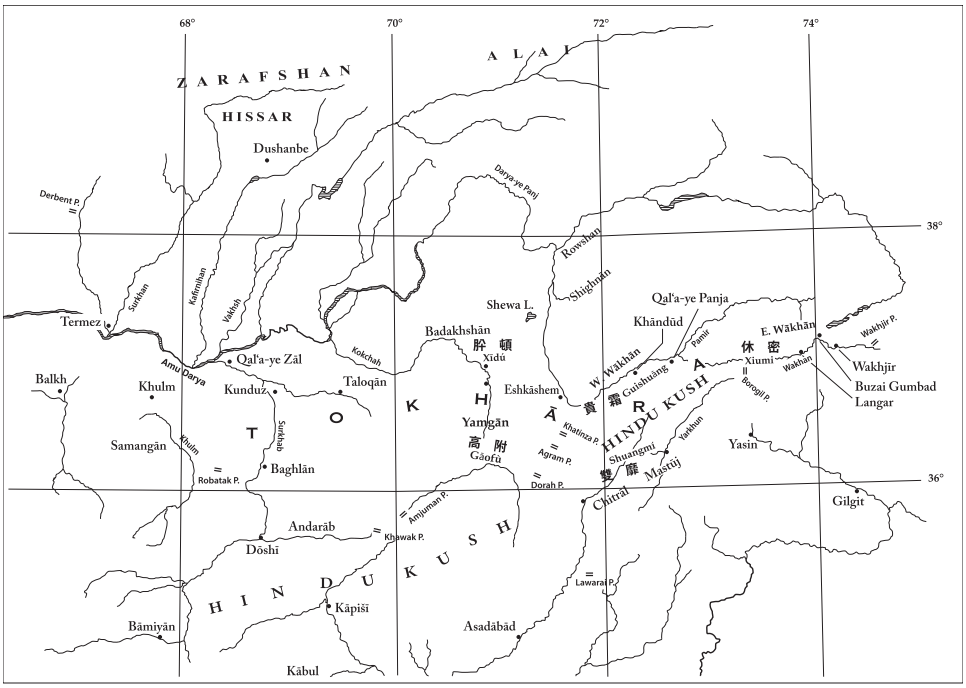
波斯がトハーラの北にあるのも奇異で，北と西は入れ替らなければなるまい。即ち，『魏書』西域伝吐呼羅の四周は，東が苑湯，西が波斯，北が悉万斤，南が名称不明の連山となる。トハーラの北方が悉万斤（サマルカンド Samarkand）というのも地図上不当ではあるが，アム Amu 河北岸から，北の，ヒッサール／ザラヴシャーン山脈（Hissār/Zarafshān）～アライ（Alai）山脈までの一帯は，大体いまのタージク共和国ではあるが，ここを統一する地理上の呼称が往古からない（添付地図参照）。そのためか，サマルカンドから南下してテルメズ（Termez）に至った玄奘でさえ，サマルカンドをトハーラの北としたほどである。もし『北史』西域伝編纂において吐呼羅国の北方を悉万斤としていたとすれば，『西域記』巻12を見たのかもしれない。なお，『隋書』西域伝ではトハーラを吐火羅と表記した。このトハーラは広域ではなく，『西域記』の活国のことである［桑山 1985a : 142-144］。

3. 玄奘の「トハーラ国故地」

トハーラについて最も詳細なのは玄奘関係の文献，特に『西域記』と『慈恩伝』である。『西域記』巻1で玄奘が鉄門を出でて「覩貨邏国故地」に至るというとおり，ここにいうトハーラとは往昔のトハーラ地方であって，それを精確に玄奘は示そうとした。なぜそんなに玄奘が「故地」にこだわったかは不明だが，玄奘の謁見時に太宗が，現地で直接見聞したことに基づいた，紀行報告を要求したことは，『慈恩傳』が詳述する。そういった太宗の要請がこのように『西域記』編輯に現われたのであろう。

それによれば，トハーラ国故地は，東西が三千里，南北は千里，北は鉄門，南はいまのヒンドゥークシュ山脈，西はペルシア，東はパミール（Pamir）を出ない範囲である。境域の真ん中を大河が西に流れる。よってトハーラはアム河の南北にわたる一大地方となっている。ところが『史記』大宛列伝はトハーラの広さには触れず，ただ北岸の大月氏との関わりで叙述され，縛芻河の南岸にあることだけが判るだけである。『西域記』でいう「故地」が北魏時代のトハーラを意識するはずもない。「故地」といえば漢代のトハーラを指すのであろうが，漢代のトハーラは北岸までは至らない。

「覩貨邏国故地」を概述してから，「順縛芻河北。下流至呾蜜国」と記す。読点は季羨林等［1985］の読みである。章巽［1977］は読点を付けていない。水谷真成［1971 : 32］は，鉄門を出て「トハーラ国に至る」と訳したが，「トハーラ国の故地に至る」が正しい。桑山訳［1987 : 10］は，「アム河北岸沿いにながれを下って……」と勝手に再解釈されうるので，訂正して，「縛芻河の北方にいき，それからスルハーンダリヤ（Surkhan Darya）を下ってテ



地図：五翕侯とトハーラ周辺

ルメズに至る」とする。玄奘はデルベント（Derbent）から順路にてスルハーンダリヤ流域に出，下ってテルメズに行った。『慈恩伝』はテルメズに言及せず，鉄門をこえてから縛芻河を渡って数百里で活国に至ったとする。これが実際の旅程であって，舟運によったのであろう。

ここに示した覩貨邏国故地のほかに一例だけ覩貨邏故国というのが巻 12 のホタン東方に孤立して出てくる。水谷［1971］はこれをスタイン M. A. Stein が発掘したエンデレ（Endere）遺跡に当てる［Stein 1907 : 435］。「トハーラ故国」はいろいろに解釈されるが，異なった表記によって玄奘が「故地」と区別したのである。

『西域記』巻 1 では，テルメズから先をトハーラ国の故地だとして，まずアム河の北側におけるトハーラの国々を邏列する。呾蜜から東へ，赤顎衍那（Chagāniān），忽露摩（Ākharūn），愉漫（Shūmān），鞠和衍那（Kobādiyān），鑊沙（Wakhsh），珂咄羅（Khuttal）と並び，珂咄羅の東側がアムの屈曲地帯となり，拘謎陀（Kumedh）は屈曲地帯の北から東にかけてで，南にロウシャン（Rowshan）地方と，さらに南が尸棄尼（シグナーン Shighnān）とである。その解説は巻 12 にあるが，シグナーンはトハーラ故地としていない。よってここクメーダまでがアム北岸（右岸）のトハーラで，西の呾蜜をいれて 8 地方である。

継いで『西域記』巻 1 はアム河南部（左岸）に移り，列挙するトハーラ故地は次のとおりである。達摩悉鉄帝（Dar-e Mastit），鉢鐸創那（バダフシャーン），淫薄健（ヤムガーン），

屈浪拏（Kurān），咽摩呾羅（Dara-ye Īm），鉢利曷（Barig），訖栗瑟摩（Kishm），曷羅胡（Rāgh），阿利尼（Alini），菅健（Munjān），活（War），闊悉多（Khōst），安呾邏縛（Andarāb），縛伽浪（Baghlān），紇露悉泯健（Rūi Shimingān/Samangān），忽懍（フルム），縛喝（バルフ），鋭秣陀，胡寔健，呾剌健とバルフ南の掲職国である。梵衍那（バーミヤーン）は域外である。よって南岸は 21 地方で，「往昔のトハーラ地方」は総数 29 地方から成り立っていた。「川に依り険に拠り分かれて 27 国」という地域数より，どうしたわけか，2 地方多い。

縛喝以西，西南にある 3 地方，鋭秣陀，胡寔健，呾剌健は，ヒンドゥークシュの北部にありといわれるトハーラからは外れている。従ってこれを除くと 26 国。『旧唐書』巻 40，『新唐書』巻 221 下，『唐会要』巻 99 に記載する，月氏都督府が理める小城総数 24 州に近い。一方クメーダ地方はいまのダルワーズ（Darwaz）で，これもトハーラなのか，どうか。南へロウシャン，シグナーンへとアム屈曲地帯の外側を行ってワーハーンと繋がる地方である。それなのにダルワーズとワーハーンだけがトハーラだ，というのもよく判らない。ロウシャンとシグナーンが，パミールに入るからか。なお Adamec［1972］では，ロウシャンをシグナーンの一部ともしている。ダルワーズをもし算入しなければ 25 国になる。月氏都督府が 25 州だという記事も実は『新唐書』巻 43 下，『唐会要』巻 99 にある。

4. ワルワーリズと活と藍市

『フドゥード』は 10 世紀末の地理志であるが，そこにみえるトハーリスターンは玄奘情報の広大さとは較べようもなく狭い。「バルフ，トハーリスターン，某々」というように，地方名を列挙するところが，71，105 頁など，いくつか出てくるが，バルフとトハーリスターンが必ず異所と判るように記す点を注意する。バルフはトハーリスターンとは別地域であることを示唆するからである。Minorsky［1970］の 100-122 頁と 337 頁以下の注釈にトハーリスターンを記録するが，108 頁，No. 68 のフルムの叙述は注目に値する。

> Khulm lies between Balkh and Ṭukharistān in a step（*ṣahrā*）at the foot of a mountain. There is a river there and the land-taxes（*kharāj*）are levied on the extent of irrigation（bar-ab）. It is a place with much cultivation.

トハーリスターンは，バルフともフルムとも別の土地で，ずっと東方に偏在していることが，これによってはっきりする。この貴重なペルシア語地理志をロシア語と英語とに訳したミノルスキー V. Minorsky までが（英訳はミノルスキー夫人がパリの寓居で行なった），一般にトハーリスターンはバルフ以東だなどと，通り一遍のことをいっているのはいただけない［Minorsky 1970 : 337］。

ところが，バルフが大宛列伝大夏の藍市城だと，故無しにいわれて久しい。プーリーブランク E. G. Pulleyblank［1962 : 122］は，フルムの語頭子音が「監氏城」に表われているとして，両者が繋がるとする。1963，1974，1977，1978 年とフルム近辺を歩いてみた様子では，

いまのフルムより北側に10世紀以前のフルムは多分あったと思う。あるいは後述するクンドゥズについてと同様に，全く別に遺跡が見つかるかもしれない。

フルム～クンドゥズ間は19世紀以来の道一筋で結ばれ，電話線のほかには小邑ひとつだけで，なにもない（以下，添付地図参照）。一方，フルムの東方といえば，今のバグラーン州からクンドゥズ州に繋がる沃野である。ヒンドゥークシュから出た二筋の河川は，ドーシー（Dōshī）で合流し，スルフアーブとなりクンドゥズ西部を通って北西のカライェ・ザールでアム河と合流する。道もそれに沿うが，中流のバグラーンやプリフムリ（Pul-e Khumrī）から，西へ分れてスルフ・コータル（Surkh Kōtal）神殿址を経，ロバータク碑文が発見された場所のすぐ近くで同名の峠を越えると，フルム河流域に出る。この河はバーミヤーン北方から出て，ルーイー，サマンガーンの町々をつくり，フルム手前で丘陵地帯から出て尻無し河でおわる。フルム以西では北流する河はアム河には至らない。みな尻無しである。フルム以東の諸川はアム河に落ち，自然に沃野をつくる。『フドゥード』でトハーリスターンをフルムの東だというのは，即ちトハーリスターンがスルフアーブ流域以東であったことをいうのである。トハーリスターンは東部がパミールに接近し，バダフシャーンはシェワ Shewa 湖畔が夏の移牧に適し，牧民の産品を冬営に向かう移動中売買するに適した町邑にも富む（Shīwa と書いてシェワと発音する。[Adamec 1972: 162-163] 参照。松井 [2011: 40] は乖る）。だが，バルフやフルムの諸地方は，以東の地方とは自然人文地理上の環境は全然違い，ここで移牧が行なわれていないのは，夏季牧草に恰好の環境がないからである。

そう考えながら『フドゥード』の109頁，「Valvālij」の項（注釋では340頁，No. 73）に注目せざるをえない。10世紀にワルワーリジュは繁盛な町で，トハーリスターンの首都である。

> Valvālij, a flourishing town and the capital (*qaṣaba*) of Tukharistan. It possesses numerous amenities and running waters. Its people are sociable (*āmīzanda*).

即ち『西域記』巻12や『慈恩傳』巻5の活国都城がワルワーリジュである。活国都城はクンドゥズと従来いわれてきた。今のクンドゥズはアム河から60キロほど南にあり，19世紀から20世紀に建設された町である。クンドゥズ北東郊のバーラー・ヒッサール（Bālā Hissār）遺跡も現クンドゥズ成立までつかわれていた町の跡である。「活國は縛芻河側に居る。……都城は河の南岸に在る。」とする『慈恩伝』を基に考えると，クンドゥズの北方で，アム河南岸のひとつの遺跡を，ワルワーリジュに当てるべきである。

『フドゥード』の記事は，一方で『史記』大宛列伝の大夏藍市城を髣髴とさせる。『フドゥード』が，ワルワーリジュをトハーリスターンの *qaṣaba* であるというなら，大夏の大都市藍市城（監氏城）にもなりうる。建築や土木遺構からみると，ティムール朝以降にさかんになったバルフやフルムを藍市城に証拠なしに当てるよりは，まだましな比定であるが，一方で，アフガニスタン北部から発見された前4世紀アケメネス朝時代のアラム語文書には，

フルムのまちが，バクトリアとソグドのサトラップの配下が総督として駐屯した場所として何度か登場するという点には注意しておかねばならない［Naveh & Shaked 2012 : 19–20, 99］。フルムがトハーラではなくとも，アム河南岸の要地であったとの情報は，考古調査も不十分なフルム周辺の地に関する極めて貴重な情報である。しかし，いまこれを直ちに前 2，1 世紀のトハーラの首城に当てることは控え，『漢書』大月氏国都たる監氏城をフルムとする Pulleyblank［1962］の説に無理に加担しないでおく。欧人は今も尚バルフやその近辺にとらわれ勝ちで，その考古調査にも余念無いが，藍市城の遺構や活（ワルワーリジュ）の首都遺跡はカライェ・ザール北の，広大な都市遺跡に相異ないと，見当をつけているからである。それより西の，いわゆるクンドゥズ遺宝を得たヘシュトテペ（Khesht Tepe）は少し規模がちいさい［Le Berre 1965 : 83–88］。いずれにせよ，遺跡がアム河南岸に接近して立地することが同定には肝要である。

1963 年 9 月－10 月に水野清一博士指揮下，クンドゥズのバーラー・ヒッサールを小野山節，藤田国雄，杉村棟，田中重雄，桑山は試掘した。アム河沿いの踏査は当時御法度だった。そうでなければそこで遺跡探査も行なわれたはずだ。1962 年の遺跡踏査は北部アフガニスタンでおこなわれたが，アム河岸はできていない［水野清一 1962 : 37–81］。フランスもガルダン J. -C. Gardin とリヨネ B. Lyonnet［1997］が土器の収集を行なったが，詳細な報告はみていない。われわれはバーラー・ヒッサールのアルク（ark 城塞区）最上部最上層で 19 世紀遺物を得，シャフリスターン（shahristān 市街区）の街路最下層では自然層に達した［小野山 1966 : 359ff.］。後者自然層上の数層は暗紋赤色陶器片を含み，これはテルメズのカラ・テペ（Kara Tepe）陶器と同型式で 5 世紀には当るが，ここはやはり古代の活ではないだろう。

1967 年 12 月，クンドゥズ西郊チャカラク・テペ（Chaqalak Tepe）発掘を他遺跡との比較編年を可能ならしめる成果を得ておわった。水野清一，有光教一，樋口隆康，吉本堯俊，小西正捷，浪貝毅，松原正毅と桑山が，1964 年から携わった。松原はその発掘終了後にカライェ・ザール所在の遺跡踏査を行なった。京都大学人文科学研究所考古資料中にカライェ・ザールのバーラー・ヒッサール採集陶器数片があるのはそのためである。その陶片は，チャカラク遺跡最新層と同時代，つまり 7 世紀にありえる，肩の張った大形甕形式のひとつである［桑山 1971］。将来再び京都大学でアフガニスタンにおける考古学調査が組織され，発掘が可能となり，その成果として 7 世紀部分がこの遺跡に存在することになれば，漢籍にみえる王名遠の月氏都督府設立記念「聖徳碑」の出土も期待できる。藍市城時代まで到達するかはわからないが。

5. 大月氏のサマルカンド居止

以上とは若干方向が異なるが，桑原隲蔵の「張騫の遠征」は，藤田豊八［1974 : 45–56］や内田吟風［1938 ; 1972］の反論にもかかわらず，妥当な見解が諸問題を解決している。桑

原は，その中で，西徙した大月氏がサマルカンドで当初落ちついたとしている。その事は桑原の証拠によって認められるが，以後大月氏がどうなったかについて，桑原は後の検討に任せる由を述べている。ここではこれについて考えたことを記し，批正を俟ちたい。『史記』大宛列伝大月氏のところに記録された，その国の四周が問題である。

白鳥庫吉［1970 : 85-88］によれば，ソグド（Sogd）一帯は当時康居の翕侯の支配地域であった。桑原はこれを是認したうえで，大月氏は西徙当初サマルカンド周辺に散居したとする［桑原 1968 : 284-285］。『史記』は大月氏が大宛の西，2，3 千里にいるというが，唐史ではサマルカンドと大宛の首都ホージェンド（Khojend）間が約 700 里である事実を示し，これを元にサマルカンド停止説を出したのである。ホージェンド中心の半径 700 里の円周は，鉄門（デルベント）以東ヒッサール山脈以南の地方も通過しうる。よってサマルカンドばかりが停留地とはいえないのである。

大月氏の四周は，『史記』大宛列伝に「居嬀水北。其南則大夏。西則安息。北則康居。」とある。これは二箇所の四周を半々ずつ繋いだものである。後半二句は，サマルカンド辺からみた方角である。前半二句は，「大月氏はアム河の北方にいる。そこから南へ行くとトハーラだ」と解するが，これがサマルカンドを中心にみた方角とはおもえない。もっと東へ進んだ地方からみたもののようである。大月氏はサマルカンド周辺に居たあと，トハーラを南方にみるアム河右岸地方に移動した。サマルカンド辺は康居の息がかかった場所で，ながく占拠できる場所ではない。前 129 年に張騫が受けたように，康居からなんらかの指示を得て，やがてトハーラの対岸地方に移動したはずである。玄奘が鉄門を通ってスルハーンダリヤ下流に至ったように，アム河北岸地方に至り，南岸の平穏な大夏地方を臣従させた。『史記』でも『漢書』でも大月氏の大夏に当たった態度は，前者では「攻敗」であり，後者では『臣畜』であって，匈奴が月氏を襲撃したような激しさは毛頭みえない。トハーラは商売上手で畏戦の民であったから，大月氏は難なくトハーラを臣として畜えたのであろう。上来述べたトハーラの境域と，大月氏が王庭をトハーラ北方に設定したとする『史記』大宛列伝とを考えると，遊牧大月氏はサマルカンドからスルハーンダリヤ流域に出，さらに東方へ展開したのち，『フドゥード』のフッタル地方まで入ったのかもしれない。

そうなれば，アム以北は大月氏領となる。南のトハーラを臣畜すれば，アム河の南北はデルベントからバダフシャーンまで，北はヒッサール山脈，ザラフシャーン山脈，アライ山脈，南はヒンドゥークシュまでの間も，大月氏領であった。漢代の大夏はアム河の南岸と『史記』はいい，北岸には至らなかった。時を経て上述のように北魏代にはトハーラは，国の中心を薄提城と呼び，その南に漢楼大河が西流していると認識している。玄奘も縛芻河が中境を西流するといい，『魏書』と似たり寄ったりの広さを裏付けているのは，大月氏進出時からの広さをいったものであって，この域がトハーラとよばれるようになったのは，このときではない。なお，『魏書』に薄提城が漢楼大河の南だいうのは，『史記』以来の認識とは異なる。但し漢楼と縛芻を同一の河川とするか，「南」が誤っているのか，によって『魏書』の

トハーラに対する理解が違ってくる。ここではそれに触れない。

Sims-Williams［2002 : 230］は，バクトリア文書にトハーリスターンの名が出てくるのは500年頃になってからであるといったが，のちにかれは，バクトリア語の一碑文にカニシカ時代トハーリスターンの言及がある由を示した［Sims-Williams 2015 : 255-264］。元来南岸の一部地方から発して，トハーラの名が土地を伴って拡大使用されるのは，トハーラ自体が北方へ伸張する，つまりトハーラびとが北方へ展開した結果ではないのか。大月氏に臣従していたトハーラの一小長である貴霜翕侯が，勢力を大月氏と逆転してクシャーンシャーを名乗り，クシャーン朝をはじめたことがおおきく関わるはずである。それが起ったのを『後漢書』西域伝に従うなら，大月氏が西徙し当地に入って約百年目のことであった。大月氏がトハーラに入ったのは前138年以後で，大月氏進出の下限は前133年であることは，初めに述べた。それで，クシャーンの興起は前38－前33年ということになる。懸泉置遺跡出土漢簡に，大月氏配下の翕侯名を記す紀年漢簡がいくつかしられる中で，前37年銘をもつ一簡が翕侯名をもつものとしては最も遅い。したがってクシャーンの独立は前36年以後，前33年以前，即ち前36，35，34年である。クシャーンは貨幣を打刻したが，クシャーンヤブグにしてクジュラ・カドフィセス（Kujula Kadphises）名がある貨幣は，この年次以前の発行にかかり，クシャーンシャー銘貨幣は以後のものである。

6. 雙靡翕侯とガンダーラ

ワーハーンからヤムガーン，バダフシャーンにかけて隣り合った五の翕侯（*yabgu*）の名は地名である。『魏書』や唐代文献にもあらわれる賒弥や商弥が『漢書』雙靡と共通し，今日のチトラールを指すからである。地名であれば，五翕侯が同じトハーラ地方の，同じ民族であったと考えても許される。かれらがアム河北岸の大月氏を攻破した。大月氏のトハーラ攻略によって成立した大月氏国の境域は，トハーラ人の大月氏征服によって，その広さのままはじめてトハーラ国と名を変えたはずである。先述のシムス=ウイリアムズのいう，カニシカ（Kaniška）時代におけるトハーリスターン名の存在も当然の成り行きであり，中国においてはその広さのまま情報が保持され，『西域記』まで至った。一方，現地ではクシャーンが消滅すれば，トハーラの名を語り継ぐ意味も義理もなく，10世紀までトハーラは元来の地名となってアフガニスタン北東部に残り，ターラカーン（Tāloqān）一帯にはいまもタハール（Takhār）あるいはトハールとの地方があるわけである［Adamec 1972 : 175-176］。

いずれにせよ，チトラールの雙靡翕侯は大月氏の翕侯として「漢使に共稾（供給）する」役目とは離れ，別途の役割を担っていたと想像される。それは，地理的には他四翕侯と離れ，ヒンドゥークシュの極東脈の南に位置し，他の翕侯地とは複数の峠を介してかろうじて通じていたからであり，また，東部ワーハーンへ入った東来の漢使が，態々ワーハーンからボローギール（Borōgīl）峠を経てヤルフン（Yarkhun）渓谷へ下り，チトラールへ赴き，更めてドーラ（Dōrah）峠を登攀してヤムガーン，バダフシャーン方面へ移動するのは，現実

にはありえず，遣大月氏使という使命からも漢使がそんな手間を掛けたか，甚だ疑わしいのである。一方，チトラールからラワレイ（Lawarai）峠を越えれば，南のガンダーラへ交易上直結する。それはどの翕侯もなしえない，あるいは，難しい，かれらばかりの特点であって，翕侯が活躍した大月氏の時代には，經濟上大月氏には不可欠の役割であったと考える。大月氏にとって漢に対する通交の利益が絹織物であったならば，それを雙靡翕侯を通じて南に売り捌くことは，相当の利潤を生んだであろう。なお，懸泉置遺跡では，雙靡翕侯が大月氏の身分ではなく，単独で漢へ至ったことを記す漢簡も出ている。

もうひとつ注意したいのは，雙靡以外の四翕侯の居所がかれらの夏営地ではあっても，常在地とはおもえないことである。夏営地であったならば，冬営地が存在しなければならない。近現代のパシュトゥーン（Pashtūn）遊牧民を参考にすると，冬営地はトハーラの名称の残影と目されるタハールの名がついたターラカーン一帯からバグラーン州にまでつづく平野部である。冬夏を繋ぐ距離は今は 150 キロほどで，これを 30 日程度で冬営地にもどる。文献から復原される翕侯たちの居場所をこのように捉えてみると，ワーハーンは冬場に留守になるので，漢使の大月氏来訪は夏期に集中したかともおもわれる。トハーラの住民であった翕侯たちは，大月氏進入以前からトハーラにいたのでなければならない。大宛列伝は大夏を土着というが，それは耕田の民ばかりを指したのであろうか。

大月氏が翕侯号を授与する対象は，トハーラの小長たちである。大月氏以前に別処からトハーラへ移住したひともその中にいたことを想像するなら，イリ牧地を大月氏に奪われて逃散せざるをえなかった塞種も入るかもしれない。Sims-Williams［2002 : 236］によれば，Kujula Ka*dph*ises や Vima Ta*kt*u に含まれる子音群は本来のバクトリア語にはないという。バクトリアにいたクシャーンはバクトリア語碑銘を作成したけれども，その言語がかれら本来の言語ではなかったとするなら，クシャーンがこの土地には外来の民族であったということにもなろう。一方，カニシカが建立してフヴィシュカ（Huvishka）が大修復した所謂スルフ・コータル神殿が，バグラーンに存在することを，これらと関連して，考えると，そこが既にクシャーンの父祖の地になっていたことを推測させる。クシャーンの帝王に捧げられた神殿は何処にあってもいいわけではない。バグラーンにクシャーン朝の神殿址があることの意味は非常におおきい。Devakula，神のいます処，といわれるマトゥラー（Mathurā）のマート（Māṭ）の神殿は，バクトリア語でも同じ意味をもつバグランの神殿とともに，深く考量すべきである［Fussman 1983 : 69ff.］。（2020 年 10 月）

参考文献

Adamec, L. W. ed.（1972）*Badakhshan Province and Northeastern Afghanistan. Hisorical and Political Gazetteer of Afghanistan*, I. Graz.

Balogh, D. ed.（2020）*Hunic People in Central and South Asia.* Groningen.

Curiel, R. & G. Fussman（1965）Trésor monétaire de Qunduz. MDAFA 20, Paris.

Falk, H. ed. *Kushan Histories. Literary Sources and Selected Papers from a Symposium at Berlin, December 5 to 7, 2013*. Bremen, 255–264.

Fussman, G.（1983）*Surkh Kotal. Tempel der Kuschan-Zeit in Baktrien*. Materialien zur Allegemeinen und Vergleichenden Archäologie 19. München.

al-Iṣṭakhrī, Abū Isḥāq（1967）*al-Masālik wa al-Mamālik*, edited by M. J. De Goeje, Leiden.

Kingsmill, T. W.（1878）The Migrations and Early History of the White Huns, primary from Chinese Sources. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. New series. 10, 285–304.

Le Berre, M.（1965）Prospection à Khisht Tepe. In Curiel et Fussman 1965, 83–88.

Le Berre, M.（1987）*Monuments pré-Islamiques de l'Hindukush central*. MDAFA 24, Paris.

Lyonnet, B.（1997）*Prospections archéologiques en Bactriane orientales (1974–1978) sous la direction de J.-C. Gardin*, 2. *Céramique et peuplement, du Chalcolithique à la conquête arabe*. Mémoires de la Mission archéologique Française en Asie Centrale, VIII, Paris.

Marquart, J.（1901）*Ērānšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i*. Berlin.

Minorsky, V.（1970）*Ḥudūd al-'Ālam 'The Regions of the World', A Persian Geography 372 A. H.-982 A. D*. 2nd ed., edited by C. E. Bosworth, London.

Naveh, J. & S. Shaked（2012）*Aramaic Documents from Ancient Bactria*. London.

Pulleyblank, E. G.（1962）The Consonantal System of Old Chinese. *Asia Major*. New series, 9（1），58–265.

Sims-Williams, Nicholas（2002）*Ancient Afghanistan and its Invaders : Linguistic Evidence from the Bactrian documents and Inscriptions. Indo-Iranian Languages and Peoples*. Nicholas Sims-Williams（ed.）*Proceedings of the British Academy* 116. Oxford and New York, 225–242.

Sims-Williams, N.（2015）*A New Bactrian Inscription from the time of Kanishka*. Falk, H. ed. *Kushab Histories. Literery Sources and Selected Papers from a Symposium at Berlin, December 5 to 7, 2013*. Bremen, 255–264.

Sims-Williams, N. & François de Blois（2018）*Studies in the Chronology of the Bactrian Documents from Northern Afghanistan*. Vienna.

Stein, M. A.（1907）*Ancient Khotan* I, Oxford at the Clarendon Press.

内田吟風（1938）月氏のバクトリア遷移に関する地理的年代的考証 上下『東洋史研究』3（4），29–56. 3（5），29–51.

内田吟風（1972）魏書西域伝原文考釈 下『東洋史研究』31（3），366–380.

小野山節（1966）クンドゥズのバラヒッサール城址発掘『東方学報』京都 57，359–365.

桑原隲蔵（1933）張騫の遠征『東西交渉史論叢』弘文堂.

（1968）『桑原隲蔵全集』3，岩波書店.

桑山正進（1971）『チャカラック テペ』京都大学.

桑山正進（1985a）トハーリスターンのエフタル，テュルクとその城邑『三笠宮殿下古稀記念オリエ

ント学論集』小学館，140-145.
桑山正進（1985b）バーミヤーン大佛成立にかかわるふたつの道『東方学報』京都 57，109-209.
桑山正進（1987）『大唐西域記』（『大乗仏典』中国日本篇 9），平凡社.
桑山正進（2017）貴霜丘就却の没年『東方学報』京都 92，109-209 頁.
白鳥庫吉（1970）西域史上の新研究『白鳥庫吉全集』第 6 巻 岩波書店，57-227.
林巳奈夫，佐原真（1962）アフガニスタン北部の考古学調査　水野清一編 1962，37-79.
藤田豊八（1974）月氏の故地とその西移年代『東西交渉史の研究』下（西域篇）国書刊行会，45-56.
松井健（2011）『西南アジアの砂漠文化 —— 生業のエートスから争乱の現在』人文書院.
水谷真成（1971）『大唐西域記』（『中国古典文学大系』2），平凡社.
水野清一編（1962）『ハイバクとカシュミル-スマスト』京都大学.
吉田豊（1985）補記.（桑山正進 1985a，150-152）.
季羨林等（1985）『大唐西域記校注』（『中外交通史籍叢刊』），北京中華書局.
章巽校点（1977）『大唐西域記』上海人民出版社.

（京都大学名誉教授）